

鈴木まり子（三重県四日市市）

タイトル「いびつなマル」

17歳、花の女子高生。冬休みのスケジュール帳は、ぎっしりと埋まっているはずだった。しかし、その冬、私にはクリスマスも正月もなかった。

はじまりは、2学期最後の日。体育祭のドッチボールで、はりきりすぎた。利き手の指を2本、骨折してしまったのだ。右手には、何重にも包帯が巻かれた。物を持つことすら、できなくなってしまった。そのうえ、親知らずが横向きに、はえていることがわかった。入院して、抜くはめになった。

入院をする日、外はひどく雪が降っていた。道路は凍結して、車では出かけられそうにない。「来なくていい」と何度も言っても、母は病院までついて行くと言ってきかない。雪が舞う中、凍った道路を2人で、とぼとぼ歩いた。「大丈夫？気をつけてね。」と声をかけてくる母の足元のほうが危ない。母親と出かけるのは、久しぶりだった。思っていたより、母の背中が小さくて、どきっとした。

なんとか、たどり着いた病院で、手術を受けた。全身麻酔をかけたので、目を覚ますと、頭がぼんやりする。そして、それから2週間、私の顔はパンパンに腫れあがることになった。鏡を見ると、いびつなマルが映っている。心配していた父親も思わず、ふっと吹き出すほどのひどさだ。

手の骨折と麻酔のために、服も自分で着替えられない。自分ひとりでは何もできない。何もかも、母に頼まなくてはならなくなった。まるで、小さな子どもに戻ったみたいだ。

今まで、やりたいことをしてきた。言いたいことを言ってきた。自分のことは、自分で決めるのだと言い張ってきた。親にも、ずいぶん反抗した。高校生になってからは、話す回数も減っていた。

背中を流してもらっているときに、私はひとりで生きていたわけではないのだと気づいた。育ててもらって、支えてもらって生きてると全身の細胞で感じとった。母親に対して、「ありがとう」と素直に言えた。今まで飲み込んできた言葉があふれてくる。悪くない冬休みだ。